2019 年度 第 2 回 海外学校教育視察

【視察先】イギリス

【期間】2020 年 2 月 8 日（土）～2 月 16 日（日）

■訪問学校等一覧

月日	訪問先等
2月　8日（土）	羽田空港発 ロンドン・ヒースロー空港経由 ニューカッスル空港着
2月　9日（日）	ダラム市内社会教育施設訪問調査
2月 10日（月）	Durham Trinity School（特別支援学校）視察 Durham Johnston Comprehensive School （公立中等教育学校）視察
2月 11日（火）	Durham 大学 視察 Durham School （私立寮制学校）視察
2月 12日（水）	ニューカッスル空港発 ロンドン・ヒースロー空港着
2月 13日（木）	ロンドン市内社会教育施設訪問調査
2月 14日（金）	Horsenden Primary School （公立小学校）視察 ロンドン日本人学校 視察
2月 15日（土）	ロンドン・ヒースロー空港発
2月 16日（日）	羽田空港着

イギリス ダラム・ロンドン市内視察

2019 年度「海外実地教育研究」第 2 回目は 2 月 8 日（土）～ 2 月 16 日（日）、院生 4 名・教員 5 名イギリスのダラム、ロンドンの現地校や社会教育施設の訪問および調査を実施しました。

イングランド北東部にあるダラムでは、帝京大学ダラムキャンパス内の学生寮に宿泊しながら特別支援学校や公立中等教育学校、オックスフォード・ケンブリッジに次ぐ名門ダラム大学、Durham School （私

Durham Johnston School 教員研修参加

立寮制学校）などを訪問しました。滞在中、ダラム大学セント・メアリーズ・カレッジの学食を利用するなど大学の町ダラムの雰囲気を感じながら、様々な学校を視察してイギリスと日本の教育システムとの相違点について学ぶことが可能となりました。特に Durham Johnston Comprehensive School （公立中等教育学校）では外国語クラスの教員研修に同席する機会に恵まれ、研修システムについての理解が深まりました。（上記写真参照）日々の訪問をふまえ、夜にはリフレクションを行い、それぞれが感じてきたことを持ち寄りじっくりとそれについて対話することを通して、自らの価値観や見方を捉え直す時間となりました。

ロンドンではグループ校である帝京ロンドン学園に宿泊しながら現地校を視察する予定でしたがコロナ・ウイルスの関係で急遽、ロンドン市内のホテルに宿泊してナショナルギャラリーや大英博物館などの社会教育施設訪問および調査を実施しました。残念ながら、帝京ロンドン学園や同じ施設内にある ISCA（ロンドン芸術国際高校）の視察はキャンセルとなりましたが、Horsenden Primary School （公立小学校）やロンドン日本人学校の視察は予定通り実施しました。前者のエマ校長との質疑応答（下記写真参照）では、昨今のイギリスの教育政策の現状と課題を認識することによって今後の日本の動向について考察することが出来ました。後者では、石山秀樹校長より海外における日本人学校の運営、特に OFSTED（英国教育水準局）審査の厳しさについてお話を聞くことが出来き、7 日間の充実した海外研修を無事に終えました。

Horsenden Primary School エマ校長との質疑応答

※OFSTED （Office for Standards in Education）は、教育技能省から独立した政府機関（non-ministerial government department）であり、①教育機関の監査（学校監査及び地方教育部局監査）および、②教育技能大臣への助言、の 2 つを大きな役割としている。

伝統と文化、子供たちの目的意識を感じたイギリス

今回の研修はコロナウイルスと台風により現地での行動が制限され、行程の変更を余儀なくされた。当初は７つの学校見学を行う予定だったが、それが５校となってしまった。また、エジンバラ訪問も中止となった。そのことを知った瞬間は大きなショックを感じたが、空いてしまった時間を無駄にすることなく、ダラム、ロンドンの視察に充てることで予定してなかった多くの発見があった。

ダラムでは、大聖堂で行われているミサに参加し、町の人々を結び付けている教育を超えた大きな力を感じることができた。また、百年以上も前の建物を大切に使い続けている様子から、伝統が町を作っていること、町が伝統を重要視していることを自然と理解することができた。

また、ロンドンでも、美しい都会の街並みを残しつつ、近代的な要素をプラスしていることに感激を覚えた。２回のミュージカル鑑賞も自分の心を大きく揺さぶった。観光客が多数を占めていることもあるが、連日多数のシアターが満員になる事実を知り、大衆娯楽としてミュージカルが受け入れられていることにうれしさとうらやましさを感じた。

このような伝統と文化を背景にイギリスの教育は変化を続けていた。日本と同様な課題を抱える中で子供たちの様子から感じたことは目的意識だった。重要視されている大学進学に向けてどのような気持ちで日々の学習に向かっているのかが見てとれた。自分が大学でどんなことを学びたいのか、何のために今学ぶ必要があるのか、という意識をしっかりともっている子供たちが多くいた。ただ単に大学に行きたい、ちょっとでもいい大学に行きたいという意識よりも高い次元で将来の自分を考えられているようだった。今回見学できた学校、説明を受けられた学校は少なかったが、そこで感じられたのは目的意識。今、日本でも学びに向かう人間性にスポットが当てられている。イギリスから帰国して改めて、自分が前に立つ子供たちには、しっかりと自分の将来や目的に向かって意思決定できる機会を作ってあげられる教師になりたいと強く感じている。

スクールリーダーコース　１年

日本が真似たイギリスの教育

イギリスを訪れてまず感じたことが、日本にいる感覚と似ているということだった。もちろん、街並みや風景、文化や歴史などは、全く違う。訪れる所々で、歴史ある建造物や教会、城等を見ることができ、感動した。しかし、人との関わり方やそこから得られる感触、公共の場での装いやマナーなど、日本とよく似ていると思った。それは、これまで日本が、イギリスの制度や方法を取り入れ、真似てきたという歴史的な背景が関係しているのかもしれない。あるいは、島国であることやもともとの気質が似ているのだろうか。学校を訪問し、話を聞いたり、授業を参観したりした時もそれを感じた。

参観した授業は一斉授業が基本で、児童・生徒は教師の話を聞きながら、各自がノートを取り、熱心に学んでいた。時には実験を行ったり、ペア学習や討論を行ったりしながら学習を進めていた。問題を黙々と解いていくような習熟のような場面もあれば、問題解決学習のような場面もあった。定期的にテストがあり、生徒はそれをクリアしていくために、そして、次のステップとして進学や社会での活躍を目標に学習に取り組んでいるようだった。授業のやり方や教員の研修体制はもちろん、現在抱えている課題などについても日本とよく似ていた。

オランダを訪れた時には、個に応じた教育、ゆとりや自由のある教育といった印象が強く、日本とは違う点ばかりが見つかって大きな刺激を受けた。そして、教育は、児童・生徒が今後どのような社会の中で生きていくのかが、大きく関わってくると

いうことを強く感じた。２つの国を比較すると、「効率よく、質の高い教育を行う」という目的は同じだったように思う。しかし、それどう実現させるか、取り組みが違う。どちらがよいということではなく、今後、日本がどのような方向に向かっていくのか、それを考える上で、オランダとイギリスの海外研修は、自分にとって価値あるものとなったように思う。イギリスの教育がこれからどう課題を解決し、効果を上げていくのか、今後の動向からも学んでいきたい。

スクールリーダーコース　１年

日本教育とイギリス教育の比較から

I'm a Physics teacher at public high school.と日本国内で、イギリス出身の方を含め、自己紹介をする機会はこれまであった。しかし考えると、イギリスのパブリックスクールとは私立学校であり、エリート養成、英国一流名門校、映画ではハリーポッターの世界観からくる寄宿舎生活、といったイメージが私の中にあった。こういった素朴なところの比較から、日本教育とイギリス教育の比較を始めることにした。

そもそもイギリス教育については階級制度を前提に考えていく必要があるので、文献書物で調べても分からない"雰囲気"、"空気"については独断で想像することにした。最近の情勢からは、ブレグジット(Brexit)の影響があるが、旅行中に直接、その影響により困る場面はなかった。また、イギリスと表記しても、対象はイングランドであり、連合王国を構成しているスコットランド、ウェールズではイングランドと若干の違いが見られる。こういったことは、実際にイギリスで生活をするともう少し理解できるのではないかとイギリス訪問後の今でも思う。そういった様々な社会的背景等によって、イギリスには複雑な教育システムがあることを改めて知ることができた。人口から比較すると他を圧倒する人数を抱えているのがイングランドであるし、これにより教育体系でも大きな影響力を及ぼしている。更に日本人口と比較すると日本の規模の方が圧倒的に大きいため、単純にイギリス教育と日本教育の比較はできない。実際に今回訪問をした各学校の規模、生徒数をみると、日本国内における私の経験した教育環境とは規模が小さいことは共通していた。

しかし、現在の教育庁(文部科学省)と学校との関わりの違い、理科教育の実際、教員の勤務状況、統一試験の効果と課題など、直接イギリスの先生方へ質問し、体験しないと分からないことも多い。一方で両国に共通していることは、生徒のために何ができるかを常に考え、教員集団が結束して対応にあたり、学校地域各家庭全体で良い教育環境を構築していくことにある。今回の訪問でイギリス教育の一面を知ることができた。再び訪問の機会が得られたら嬉しい。

スクールリーダーコース　１年　石川　真理代

教員になる前に行ってよかったイギリス

今回の研修では、主に①困難な状況下でどのように打破し、プラスに転じさせるか②現代の日本の姿の源流はイギリスにあること③外国から見た日本の素晴らしさに気づかされた。

台風やコロナウイルスによる影響で、渡英後に視察中止、研修先宿泊先変更を余儀なくされたが、先の見えない異国の地でどのようにプラスに転じるかは、今後人間として生きていくのに先の見えない社会、教育界、人生を生き抜く精神と同じことが言える。

また訪問先の学校で、EU 離脱に伴い国家の教育に対して財政面でのサポートが少なくなり、また締め付けがより厳しくなり、現場は困窮し、教職志望者が減少の一途を辿っているとの話があった。また個別支援を要する生徒の増加や応じた支援、社会面では国を司る国会でも二大政党制による議会制民主主義の限界なども日本と同様の問題点を抱え

ているのではないか。だからこそ教育面でも、社会科教員としても今後のイギリスの動向を注視していく必要があるのではないかと感じている。

無事に帰国することができたのは、魚山先生をはじめとした教授陣 5 名、現職教員 3 名、そして通訳をしていただいたMIKI さん、偉川さん、また今回の研修の携わっていただいたすべての方々　コロナウイルスによる影響で世界情勢が慌しい中、研修先では視察を快く引き受けてくださったことは感謝しかない。生涯忘れられない研修となり、飛行機が羽田に着陸した際の安心感は二度と忘れることができない。感謝しても感謝しきれない。

教育実践高度化コース　1 年